

論 述 専 門 科 目

（90分）

注意事項

- 1 解答始めの指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、表紙を除いて全部で7ページです。
- 3 解答用紙は3枚です。解答は、問ごとの解答欄内に収まるように記述してください。
- 4 解答用紙には、解答欄以外に受験番号記入欄があるので、監督員の指示に従い正しく記入してください。
- 5 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、落丁・乱丁又は解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせてください。
- 6 下書きの必要があれば、下書き用紙を使用してください。
また、問題冊子の余白等は、適宜利用して差し支えありません。
- 7 問題冊子及び下書き用紙は、試験終了後、持ち帰ってください。

問題

サステナビリティに関する次の文章を読み、7 ページの設問に答えなさい。

「サステナビリティ」と聞いて思い浮かぶもの

皆さんは「サステナビリティ」や「持続可能性」という言葉を聞いたときに、どのようなイメージが思い浮かぶでしょうか。再生可能エネルギーやエコカーなど、低炭素社会に関すること。脱プラスチックやゼロ・ウェイストなど、ゴミ問題に関すること。あるいはロハスや自給自足的なライフスタイルなどが思い浮かぶでしょうか。最近ですと国連が2030年までの人類共通の開発目標として掲げている、持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals の略）が思い浮かぶ方も多くいらっしゃるかもしれません。これらのいずれもがサステナビリティと深く関連しています。それではこのサステナビリティとは、どのような概念なのでしょう。はじめにこの言葉の使われ方を見ていきましょう。

近年、「サステナブル（持続可能な）」や「SDGs（エスディー・ジーズ）」という言葉が、実に多くの場面で登場しています。例えば、日本社会が直面している高齢社会に関連して、「持続可能な社会保障制度」という表現があります。これは、総人口が減少しながら高齢化していくなかで、年金をはじめとする社会保障制度を従来のやり方で維持していくことが困難となっている状況について、制度改革を通じて将来的にも継続できる仕組みをつくる必要がある、という意味合いで用いられます。

SDGs については、特にテレビや新聞、ラジオにて特集が組まれるようになってきており、最近ではこの単語を見聞きしない日がないほどです。掲げられた 17 の目標と 169 のターゲットの達成に向けて、企業向けのセミナーが行われたり、学校教育のなかでも取り上げられるようになっており、日本社会全体で SDGs に関連した動きが広まりはじめています。こうした活動への賛同を示す意味で、SDGs の 17 目標を象徴する 7 色の輪のピンバッジを身に付けている人を、街なかで見かける機会も増えてきました。

こうしたことは、メディアからの発信や企業・学校でのアドボカシー¹の成果と言えると思いますが、同時に、「サステナビリティ」や「持続可能性」という言葉が少しずつソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）上でも使われはじめています。例えば、ツイッターを見てみると「自分自身の持続可能性」という表現があり、「何事も頑張りすぎないようにほどほどに」というような意味合いで使われていたりします。仕事のことも、家庭のことも、頑張りすぎると心身良好な状態で過ごしていくことができなくなってしまうので、ワークライフバランスに気をつけながら、「自分自身の持続可能性を保とう」というような自分を励ます、もしくは自分を大事にしようというメッセージです。インスタグラムでも「#サステナブル」や「#持続可能性」が広く用いられており、キッチンからはじめる脱プラスチック、マイストローやマイ箸の利用促進、フェアトレードを応援する投稿などが多数あります。

こうしてサステナビリティという言葉が世の中で徐々に広がり始めたことは歓迎すべきことだと思います。その一方で、メディアの特集や SNS 上での発信をフォローしている方々でも、いざサステナビリティが何を意味する言葉なのかを誰かに説明しようとするとき、なかなか上手く説明できない

い、というような体験をされたことがあるのではないのでしょうか。また、職場で企業の社会的責任や環境行動について話すときには、「サステナビリティ」や「SDGs」という言葉を使うけれども、友人や家族との普段の会話のなかでは一切使わない、という方も多くいらっしゃると思います。こうして、サステナビリティは、非常に限定的なシーンのみで使われる、特殊な言葉になりつつあるでしょう。

認知度調査の結果

ここで、サステナビリティの認知度について、民間企業が実施した調査の結果を見ていきましょう。2020 年 3 月に、My Voice が全国の約 1 万人を対象に実施した調査では、「サステナビリティ（持続可能性）」という言葉を知っていますか」という質問に対して、「どのようなものか内容を知っている」と答えたのは、全体の約 2 割でした。同じ質問に対して「知らない」と答えたのは、全体の約 5 割でした。そして、サステナビリティに「関心がある」との回答は、全体のわずか 1 割に留まりました。この結果からすると、「サステナビリティ」はまだまだ世の中に浸透していない言葉と言えるでしょう。

それでは、SDGs の場合はどうでしょうか。2021 年 1 月に、楽天インサイト株式会社が 20 歳から 69 歳の男女 1000 人を対象に実施した調査では、SDGs について「よく知っている」と回答したのは全体の約 2 割、「聞いたことがある」との回答が約 3 割でした。これらの回答を合わせると、回答者全体の約 5 割が SDGs について「知っている・聞いたことがある」という結果でした。

サステナビリティを知っていると答えた方が全体の約 2 割ほどでしたから、より多くの人にとって SDGs のほうが馴染みのある言葉であることが見えてきます。

一方で、同調査において、SDGs の 17 目標のなかから「実際に取り組もうと思う目標」についても尋ねていますが、これに対しては、約 4 割の回答者が「あてはまるものはない」と答えています。つまり、全回答者のうちの半数が SDGs について見聞きしたことがあっても、多くの方々が実際に取り組もうと思うものが SDGs のなかにはない、と感じていることがわかります。

こうして、近年行われた認知度調査の結果を見ていくと、SDGs で示されている 17 目標と自分自身の日常をどのように関連付けたらよいのかわからない、あるいはその必要性もそもそも感じていない人々が潜在的に多いことがわかりました。認知度の比較的高い SDGs についてさえこうした状況ですから、サステナビリティについては、さらに取り組む必然性を感じることができない、というのが現実かもしれません。

サステナビリティがなかなかわからない問題

それでは、これらの認知度調査の結果が示すように、サステナビリティや SDGs は、実際に私たちの暮らしとかけ離れた存在なのでしょう。この点について、そうではなく、「SDGs とそ私たちが豊かな未来を実現するために重要なゴールだ」というメッセージを発信している書籍が既に多くあります。ここでは、同様のメッセージを読者の皆さんに向けて繰り返し発信する意図はありません。なぜなら、こうした認知度や定着度の低さは単にサステナビリティや SDGs に関する情報が不足しているためではないと、私は考えているからです。

むしろ、サステナビリティやSDGsに関する情報は既に豊富にあれど、それでも尚、私たちがこれらの言葉に対してつかみどころのなさを感じてしまうのがなぜなのかを探ってみる必要があるのではないのでしょうか。こうしたサステナビリティに対する、「もやっとしたわからなさ」や、「つかみどころのなさ」が常にあるからこそ、私たちはいつまでもサステナビリティに対して当事者意識を持てずにいるのではないのでしょうか。ここではこうした、「サステナビリティがなかなかわからない問題」の正体を探りながら、サステナビリティという言葉の意味を掘り下げていきます。

語源は「下から支える」

サステナビリティという言葉が意味するところを探るため、まずは辞書でその意味を確認してみましょう。一般的なオンライン辞書でサステナビリティの和訳である「持続可能性」を検索してみると、以下のような説明が出てきます。

「持続可能性：環境・社会・経済などが将来にわたって適切に維持・保全され、発展できること。サステナビリティ。」

ここから、持続可能性は、環境・経済・社会という私たちが暮らす世界を構成する3つの大きな要素に関することなのだということがわかります。そして、これらの3つの要素に属する項目について「将来世代にわたって適切に維持・保全」すること、そして「発展できること」という説明が続きます。大枠の意味は見えたとはいえますが、対象が広い上に説明されている行動も「維持」や「保全」と抽象的なもので、もう少し深く見ていく必要があります。

次に『広辞苑』（第七版）をひらくと、「持続可能性。現在の世代の活動が、将来の世代の活動を損なうことなく持続できるかどうかを表す概念。」とあります。世代間のつながりが示されましたが、ここでの「将来の世代の活動」とは何を表すのでしょうか。

サステナビリティのような外来語の言葉の意味を探っていく場合には、その語源をたどってみると具体的なイメージが浮かびやすくなります。英単語の語源を調べることができるオンライン語源辞書（Online Etymology Dictionary）で調べてみましょう。ここでは、サステナビリティ（Sustainability）の語源が知りたいので、名詞であるこの単語に含まれている動詞の「sustain（持続する）」で検索してみます。すると、以下のような説明が出てきます。

Sustain (v.) — from Latin sustinere “hold up, hold upright; furnish with means of support; bear, undergo, endure,” from assimilated form of sub “up from below” + tenere “to hold.”
(<https://www.etymonline.com/search?q=sustain>)

ここでは、「sustain（持続する）」はラテン語の「sustinere」にルーツがあり、この単語の前半部分の「sus-」は「sub（下から持ち上げる）」、後半部分の「-tinere」は「to hold（支える・保留する）」という意味であると説明されています。そしてこの単語全体の意味としては、「（下から）上方向に支える・サポートする術を持つ・（重さに）耐える・（つらいことに）耐える・持ちこたえる」とであると解説

されています。加えて、サステナビリティ（Sustainability）という語の後半には、「～することができる能力」を意味する「-ability」が付いています。こうして語源にさかのぼって見ていくと、「サステナビリティ」という言葉の持つ意味は「下から支えて（ある物や事を）維持する能力」のことであることがわかります。

こうした意味合いを持つサステナビリティですが、今日では広く「持続可能性」が正式な和訳として用いられています。サステナビリティがその語源から意味するあたりと、「持続可能性」という言葉を聞いたときに私たちが想像する感覚にはややズレがあるように思いますが、ここでは、サステナビリティを「下から支えて維持する能力」ととらえて読み進めていただきたいと思います。

（中略）

「持続可能性」という和訳を問い直す

サステナビリティに対する問い直しを、まずは「持続可能性」という和訳について考えることから始めていきたいと思います。今日では、サステナビリティは当たり前のように「持続可能性」と訳されていますが、そもそもこの訳はいつ頃から用いられているのでしょうか。

国立国会図書館のデータベースで調べてみると、1987年に国連が提唱した「持続可能な開発」の意味合いで「持続可能性」という表現が使われ始めたのは、1990年前後からのようです。例えば環境庁が1989年に出した『公害の状況に関する年次報告（平成元年度）』の第四章第五節は「持続可能な開発のための開発途上国援助」と題され、途上国に対する政府開発援助（ODA）を実施する際に、現地側の環境に配慮した形の開発協力を目指していく、という内容が記載されています。その直後では、1993年版の同報告書にて、人間と環境のバランスに関する部分で「持続可能な開発」という表現が用いられており、主に環境課題に関する場面で使われはじめました。

私が公文書や学術論文のデータベースで調べた範囲に限りませんが、1990年代以前にも以後にも、サステナビリティを「持続可能性」以外の言葉で表現しているものは見られませんでした。こうして今日までサステナビリティの和訳には「持続可能性」が当てられてきているわけですが、この表現が本当に世界で「サステナビリティ」や「サステナブル・ディベロプメント（持続可能な開発）」という表現が用いられているときの語感や本来の定義が意図するところを反映しているのかというと、必ずしもそうではないように思います。

前にもご紹介しましたが、サステナビリティの意味は、その語源にさかのぼるとイメージがつかみやすいです。「サステナビリティ（Sustainability）」の動詞である「sustain（持続する）」の語源はラテン語の「sustinere」であり、「下から支える・支え続ける」という意味でした。「Sustainability」という語の後半には「-ability（～することができる能力）」がついていますから、サステナビリティは、ある対象について「下から支えて（ある物や事を）維持する能力」という意味になります。広げた両手のなかであるものを下から支えて持ち、将来世代に手渡すというイメージが浮かびます（図1）。

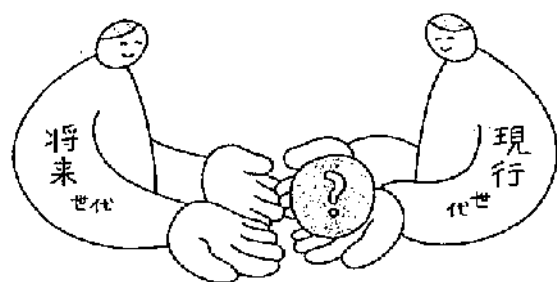


図1 サステナビリティのイメージ（広げた両手のなかにあるものを下から支えて持ち、将来世代に手渡す）

では、「持続可能性」の言葉としての意味を見ていきましょう。「持続」は「ある状態がそのまま続くこと・ある状態を保ち続けること」、そして「可能性」は「物事が実現できる見込み・物事の持つ潜在的な発展性」です。持続可能性はこれらが合わさった言葉ですから、つまり「物事がある状態でそのまま続いていくこと、または続いていける見込み」ということになります。これですとサステナビリティが持つ意味合いが、特に後半の「-ability（～することができる能力）」の部分を中心に抜け落ちてしまっています。

さらに、行動の主体となる者について意味するところも異なります。サステナビリティは、持続したいと考える対象を下から支え続けることです。そこにはその行為をする者が常にいることになります。それは個人や集団、或いは社会全体かもしれませんが、いずれにせよそうした行為ができる能力のある者（sustainするabilityがある者）の存在が不可欠です。

対照的に「持続可能性」は、ある状態について続いていく見込みですから、将来的にも続いていきそのような可能性（abilityではなくpossibility, probability, potentialやchanceの意味）の有無に関する言葉に聞こえます。言い換えると、サステナビリティの「下から支える」の場合には支える主体となる「私」や「あなた」がいなければなりません。持続可能性の場合には、持続可能であるかどうかはあくまで結果として語られ、そこに主体が不在であっても構わないことになります。こうして、「サステナビリティ」が「持続可能性」と訳される時には、その行動の主体がぼやけてしまいます。

実際にこのくらい簡略化されてしまうと、「続けていける」という表現と置き換え可能になってしまいます。例えば高齢社会が進む日本では「持続可能な社会保障制度」というような表現が使われているとご紹介しましたが、これは財源的に「続けていける社会保障制度」のことであり、言ってみれば「毎月の収入で支払いが続けられる奨学金の返済額」のような意味合いしかありません。これでは、サステナビリティが含んでいる人間社会にとって普遍的に大事にされる価値観や、それを実現していくための世代間のつながりというニュアンスがまったく失われてしまっており、ロスト・イン・トランスレーション（翻訳の過程で大事な意味が失われること）状態です。こうした状況を乗り越えていくために、持続可能性に代わるサステナビリティの日本語表現を考えていきたいと思います。

まもり、つくり、次世代につなげる

和訳を考える際には、まずは訳そうとしている概念の意味するところや細かなニュアンスを、誰にとってもわかりやすい言葉で説明する必要があります。サステナビリティがもともと含んでいる

意味合いを取りこぼさないようにしながら日本語で説明するとしたら、どのような表現があるでしょうか。私なりに、サステナビリティと持続可能な開発の概念が含んでいる「ある物や事を下から支え続けながら、次世代に手渡していく」という意味合いを含んだ表現を考えてみました。色々な表現を検討しながらも、今日のところまでいちばん納得感があるのが、次の表現です。

サステナビリティとは、今日まで私たちの社会のなかで大事にされてきたことをまもりながら、これから新しく私たちの社会のなかで大切にされてほしいことをきちんと大切にできるような仕組みをつくり、さらにそのような考え方を次世代につなげる、という考え方のこと。

サステナビリティをこのようにとらえ直し、再定義した上で、ではその新しい和訳を考えてみると、それは「まもる・つくる・つなげる」がよいのではないかと考えています。

ここでの「まもる」は、「守る」であり「護る」です。これまで私たちの社会のなかで大切にされてきた物事や価値観を守り保全しながら、外から害を受けないようにかばい保護することです。これには自然環境や遺産など有形のものも、それぞれの地域の風土に根ざした民俗芸能や信仰、伝統知のような無形のものも含まれます。

「つくる」は、「作る」であり「創る」です。物理的なものや仕組みを作ることであり、アイデアや価値を創ることです。これには、低炭素社会への転換を図るために必要な環境技術の開発や、我々の社会に生まれる全ての子どもたちが毎日栄養のある食事を取ることができ、質の高い教育を受けることができるようにするための仕組みというようなものも含まれます。

そして「つなげる」は、「繋げる」であり「継承（継いで承る）」です。人々がつながって「私たち」という共同的な主語を持つことであり、世代を超えたつながりを意味します。ここでのつなげるは、これまで私たちが社会としてまもってきたこと、これからの世の中をより良くするために新しくつくったことを、将来世代へと手渡していくことです。

こうしてサステナビリティを「まもる・つくる・つなげる」とことととらえると、いずれもが日常会話のなかでも頻繁に使う動詞ですから、より社会に広く浸透しやすくなるでしょう。また、これまで「持続可能な開発」と言われてきたものについても「まもり、つくり、次世代につなげる開発」と表現してみてもよさそうです。表現としてやや長いのがネックかもしれませんが、その場合には、「持続可能性とは、まもり、つくり、つなげることだよ」というように、難しい言葉をその意味を噛み砕いて子どもに教えるときのように、持続可能性の副題として使ってみるとよいと思います。

アドボカシー：支持すること。また、擁護すること。特に、社会的な弱者の権利を擁護すること。

（工藤尚悟著『私たちのサステナビリティ ―まもり、つくり、次世代につなげる』岩波ジュニア新書 2022年一部改変）

問1 本文の内容を600字程度で要約しなさい。

問2 あなたが本学大学院で取り組もうとしている研究について述べ、さらに、筆者が主張するサステイナビリティとの関わりについて考察しなさい。